The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「名づける」「呼ぶ・いう」の引用論（一）
Author(s)	藤田, 保幸
Citation	詞林. 1989, 5, p. 45-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67270
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「名づける」「呼ぶ・いう」の引用論（一）

藤田　保幸

1　小稿では、引用句「～ト」と述部が結びつく「引用」の表現のうち、次のようなタイプのものを採り上げることにする。

①　この車をキッツキ号と名づける／命名する。

②　……、なかには、大きなポロの玉のようなものを木でつくって、清盛入道の頭と名づけ、杖をふりあげながら、「打て、踏め」などと叫んで、当るべからざる勢いを示すやつもあらわれてくる始末である。

（花田清輝「小説平家」）

③　五輪塔は、正面を発心門と呼び、向かって左を修行門、裏を涅槃門と呼んでいます。

（福原堂礎「お墓の謎と常識」）

④　わたしはこれを「すり鉢文化圏」と呼んでいる。

（森枝卓士「カレーライスと日本人」）

⑤　東といえば、皇太子のことを、「東宮」と言った。

（森田良行「日本語をみがく小辞典〈名詞篇〉」）

⑥　信濃の国海野白取の庄に住んでいた海野一族の先祖は幸明といった。

（花田「小説平家」）

⑦　「米」の字は八十八に分解できるから、八十八歳の賀を「米寿」「米の祝い」と称する。

（森田「日本語をみがく小辞典〈名詞篇〉」）

すなわち、「名づける」「命名する」「呼ぶ」「いう」「称する」のような動詞を述語とし、それと結びつく引用句「～ト」に、専ら、名づけられ、呼ばれる対象の呼び名が示されるような「引用」（これを以下では「呼び名を引く『引用』」ということにする）について検討する。

この種の、呼び名を引く「引用」は、右に見るとおり、基本的に、呼ばれる対象をヲ格に示し、呼び名を引用句「～ト」に引いて、「XヲYト〈述語動詞〉」の構文をとるものといえる(1)。以下でも、専らその種のものに対象をしぼって考えることにしたい。

この種の「引用」は、以下の検討でも明らかなように、一般の典型的な「引用」とはかなり性格の異なるものである。小稿

では、まずこの点を掘り下げて考え、筆者の引用論においてこの種のものがどのように位置づけられるかについて私見を述べることにする。

また、この種の「引用」については、従来いくらかの研究があるが、なお十分な記述がなされていないように思える。この稿での分析を承け、続稿ではこの種の「引用」のより立ち入った分析・記述を試みることを予定している。

2－1　ところで、近年では、述語にかかる諸成分のうち、それがなくては表現が不適格になってしまう必須補語的成分と、それがあれば表現が詳しくなるが、なくても表現が不適格になるものではない任意の修飾成分とを区別し、それぞれの述語動詞にとって必須補語的な成分はどういうものかを明らかにしようという語彙―文法的発想からの研究が盛んである。こうした考え方は、必須補語の認定が難しいということはあるが、一応の妥当性を持つものといえよう。そして、そうした視点からすると、この種の、呼び名を引く「引用」は注目すべきものとなってくる。なぜなら、この種の「引用」の表現においては、「～ト」は述語にとって明らかに必須の補語であるといわざるをえないからである。

①・a　この車をキツツキ号と名づける。

①・b？この車を名づける。

③・a　これを「すり鉢文化圏」と呼んでいる。

③・b＊これを呼んでいる。

述語がどのような必須補語をとるのかという考察の一環として、この種の「引用」をある程度立ち入って検討したものとしては、益岡隆志（一九八七）があるが、これは右のような研究の流れを承けたものであり、一つの今日的水準を示すものといえよう。

益岡は、必須補語的成分を、「項」（一般に必須の「格成分」と呼ぶものにあたる）と「副詞的補足語」とに区別し、後者を更に、「引用語」と「連用語」（用言の連用形の形をとるもの）に分けたうえで、次のように述べる。

＜引用語を取る述語には、主として、次に挙げる2種の動詞がある。1つは、……「呼ぶ」「言う」「名付ける」「題する」「名乗る」等の「命名動詞」とでも呼ぶべきタイプである。これらの動詞を述語とする表現は、項として表現される対象への名付けを要求する動詞であるから、補足語として「引用語」が必要になるわけである。

引用語を伴うもう1つのタイプは、……「評価する」「認める」「考える」「みる」等の「認識動詞」とでも言うべき動詞である。＜例文略＞

これらの表現においては、引用語が、対象となる名詞の何らかの属性を、引用語の形式で表現することができるのである。＞(2)

益岡の研究は、呼び名を引く「引用」の構造を「述語句の基本的構成」一般の中で位置づけようと試みたもので、相応の意

義を認めるべきものではあるが、右に引いた部分より以下の分析も含めてなお考慮すべき点が残される。

議論を具体的にするために、益岡が「命名動詞」と呼んだものの代表として「名づける」、「認識動詞」と呼んだものの代表として「考える」を採り上げてみる。これらは「XヲYト名ヅケル」「XヲYト考エル」のようにともに「XヲYト〈述語動詞〉」構文をとる。右の益岡の説明も、そうした具体的な構文を念頭に置いて述べられたものであることは了解されよう。

さて、こうしてみると、結局益岡の「命名動詞」を述語とする構文も、「認識動詞」を述語とする構文も、パタンとしては同じだということになってくる。とすると、両者がどういう点で共通性をもつとともに、また、どういう点で差異性をもつのかを、文法的事実をふまえてある程度突っ込んで検討することが必要かと思われるが、その点がなお十分なされていないように思われる。以下、いくらかその点に立ち入った検討を考えることを通して、この種の、呼び名を引く「引用」の文法的性格を浮かび上がらせてみることにする。

2－2　「XヲYト名ヅケル」の類と「XヲYト考エル」の類については、第一に次のようなことがいえる。つまり、ともに、「XガYデアル」という主辞―賓辞的意味関係に立つことになる二項X・Yを、ヲ格と引用句で分析的に示すものなのである。この点では、両者は同様といえる。

しかし、両者の間には――益岡が先の引用の部分以下で指摘した点(3)などよりも――重大な相違があるように思われる。というのは、「XヲYト考エル」は、「XヲYダト考エル」のように、Yが名詞的な語句の場合Yに「ダ」を加えることができるのに対し、「XヲYト名ヅケル」は、「XヲYダト名ヅケル」と書き直すと、ふつう不自然になる。

⑧・a　その男を和博と考える。
⑧・b　その男を和博だと考える。
①・a　この車をキツツキ号と名づける。
①・c？この車をキツツキ号だと名づける。

これは、「名づける」の場合に限らず、呼び名を引く「引用」一般に認められることである。

③・a　五輪塔は正面を発心門と呼ぶ。
③・b？五輪塔は正面を発心門だと呼ぶ。

実は、この点は既に三上章（一九五三）の次のような指摘において十分に認識されていたことと考えられる。

〈「何々ト言ウ」に更に二つの場合がある。単語を受ける場合と陳述（センテンス）を受ける場合である。前者は「ト名ヅケル」ト称スル」ト呼ブ」場合であって、これも話法とは言えない。〉(4)

右の趣旨を明示的に示せば、ここで述べたようなことになるだろう。この三上の指摘は重要である。なぜなら、これは、「XヲYト名ヅケル」の類と「XヲYト考エル」の類では「Yト」という引用句が質的に異なるという点を指摘したものだか

らである。このことは、更に次のような事実からも了解される。

「XヲYト名ヅケル」と「XヲYト考エル」を比べるなら、後者がふつう「XガY（ダ）ト考エル」のように書き直せるのに対し、前者を「XガY（ダ）ト名ヅケル」のように書き直すことは、一般に不自然である。

⑧・a　その男を和博と考える。

⑧・c　その男が和博（だ）と考える。

①・a　この車をキッツキ号と名づける。

①・d？この車がキッツキ号（だ）と名づける。

①・dのような表現が全く不自然になるとは言えない場合もあるが、通常こうした表現はおかしく思える。三上が述べたように、「〜ト名ヅケル」等では引用句の内部にくるのが「単語」相当のものであるということは、このような点でも明らかであろう。「XヲYト名ヅケル」のような構文では、引用句「Yト」にひかれる語句にはセンテンスの述語として事柄を言い定めるような性格は乏しい。ヲ格に示される対象と、呼び名として関係づけられる単語が示されるにすぎないのである。

2−3　このように、「XヲYト名ヅケル」の類と「XヲYト考エル」の類とでは、「Xト」の性格が異なり、文法的な振舞いが相違するということは、次のような本質的相違に由来すると考えられる。

「考える」「認める」「思う」や、あるいは「言う」「述べる」等思惟・発話をあらわす動詞は、いずれも引用句「〜ト」のみを思惟・発言の内実を補足する成分としてとる次のような構造を形成する。こうした構造が最も典型的で一般に目にする「引用」の構造といえよう。

⑨　智子は善行はおしゃべりだと言った。

⑩　謙介は、もの好きだと言った。

⑪　ヘラクレイトスは万物は流転すると考えた／思った。

ところで、そもそも「言った」とか「思った」とかいう行為は、事実としては、右の例なら、「善行はおしゃべりだ」「もの好きだ」「万物は流転する」といった発話や思惟に他ならない。つまり事実としてあるのは、これら発話され、思惟されたコトバのみである。

⑨・a　善行はおしゃべりだ。

⑩・a　もの好きだ。

⑪・a　万物は流転する。

まさに、発話・思惟とは、事実としては言語記号を運用して、こうした一まとまりの（専ら判断的内容の）記号列（センテンス）を連ねていくことに本質があるといえよう。そうした事実としてある発話・思惟のコトバを指して「……ト言ウ」「……ト思ウ」と名づける構造が⑨⑩⑪の典型的な「引用」であり、逆に見るなら、そうした構造は、述語の示す行為の事実レベルでの実質を引用句が述語に照合する形で引いてきたものといえる。

さらに、こうしたaのような事実レベルの発話・思惟のコト

バは、⑨⑩⑪のようにそのまま一まとまりで引いてくることもできるが、場合によってはネクサス的に分析（あるいは、⑩・bのように補足）して、「XヲYト……」の形式をとって、対象とそれについての判断・言及という形で示すこともできる。

⑨・b　智子は善行をおしゃべり（だ）と言った。

⑩・b　謙介は二時間もサウナに入っている連中をもの好きだと言った。

⑪・b　ヘラクレイトスは万物を流転すると考えた／思った。

こうした分析化を森山卓郎は、「引用成分の繰り出し」と呼んでいるが(5)、要するに実際の発話を引いて述べるに際しては、それを総合的にも分析的にも示せるということに他ならない。「XヲYト考エル」のようなパタンは、従って、現実に表出された文的な記号列を分析的にだが引いてきたものであって、「Xト」に文（の述部）的性格が認められることも当然なのである(6)。

一方、「名づける」「呼ぶ」のような動詞が対象の呼び名を示す形で用いられる場合、通常「XヲYト名ヅケル」のような分析的な形でしか用いられなかった。もっとも、

⑫　なかでもおでんの「常夜燈」は、常連の俳優森繁久弥さんが「こんなうまいもんは〝関東だき〟やない。〝関西だき〟や」と命名した話で有名だ。

（AERA　No9（一九八九・二・二八））

のように、引用句に一連の発話をひいた文的まとまりがくることがなくはない（従って、先の①・dなども全く不可ではない）が、決して一般的な用法でなく、異和感が残る人もあるだろう。

要するに、「名づけ」といったことは、事実としては、言語記号を運用して連ねていくところに本質があるわけではない。対象と言語記号という二者の間に指し示されるものと指し示すものという関係が成り立つことに本質があるのである。従って、同じ「XヲYト……」の構造をとっても、こちらの「Yト」は、現実に表出された文の断片を引くものでなく、対象にあてはめるためにレキシコンからとり出されたり、その場で形成された「単語」をあげるものなのであって、文的な性格を帯びないのである。

3　以上のように掘り下げてみると、呼び名を引く「引用」が一般の「引用」とかなり異なる性格のものであることが明らかになってくる。ところで、こうした「引用」は、「引用」全体の中でどのように位置づけられようか。三上のように「これも話法とは言えない」と区別しておくことは妥当だが、区別したまま切り捨ててしまうわけにはいかないと思う。引用句によって何らかのコトバを引いてくるという形式的な連続性は、相応に大切にされねばならないと考える。ここで、この種の呼び名を引く「引用」の筆者の論の中での目下の位置づけを述べておきたい。

既に前節にも述べたように、筆者は引用句「〜ト」には事実レベルでの発話・思惟がひき移されるものと考える。典型的な

例で述べよう。

⑬ 嘘を吐け、と勉は思った。　（大岡昇平「武蔵野夫人」）

⑭ 「めでたいなどと言ってくれるな」と細谷は喚いた。

（藤沢周平「用心棒日月抄」）

これらは、既述の如く、事実レベルでの、勉の「嘘を吐け」という心内発話、細谷の「めでたいなどと言ってくれるな」という発話を述語の「思った」「喚いた」の実質として照合する形で引いたものである。「思った」「喚いた」ということは、事実レベルでは「嘘を吐け」「めでたいなどと言ってくれるな」という発話・思惟（心内発話）に等しい。こうした述部の示す行為が引用句に引かれる発話・思惟と事実レベルで等しい構造の「引用」を筆者はβ類と呼んでいる。

ところで、事実レベルでの発話・思惟がひき移されるとは、事実レベルでの発話・思惟という行為・出来事（事柄）がひき移されることに他ならない。この点は、拙稿（一九八九）にも立ち入って述べたが、十分に注意すべきである。つまり、⑬⑭なら、「嘘を吐け」という心内の発話行為、「めでたいなどと言ってくれるな」という現実の発話行為がひき移されているのである。このことは、例えば⑬⑭は、もし「勉」「細谷」という人物の口調・話し方を知っていれば、引用句「～ト」の部分をその話し方で言うことができ、それで別段不自然ではないといったことからもわかるし、そもそも、引用句「～ト」には命令・禁止の表現や終助詞など対他的なムード表現までがしばしば現われるといったことも、これが他者に向けての現実の発話行為をひき移したものであると考えれば十分納得できるのである。いわば、引用句「～ト」は、パロル的な現実の言語行為に向かってひらけており、現実の発話・思惟行為と同種の具体的な実物を提示する（これを「実物表示」と呼ぶ）ものなのである。

念のため、今少しβ類の例をあげておこう。

⑮ 「そうなのよ。昔からそうなんだから」と妻が忽ち同調した。　（尾崎一雄「退職の願い」）

⑯ 「それなら、頸の前のほうを見たい」と私は頑張り、その場で慎重に仰向けにすることになった。

（芹沢常行「完全犯罪と闘う」）

⑰ 「今日も楽しくて三冊も読みました」というと、「えっ三冊も。すごい読書量ですね」と、大抵の人がびっくりされる。　（朝日新聞、朝、一九八八・一二・二）

⑱ ある幹部は「日本はなめられている」と、いたく腹を立てていたよ。　（日経新聞、夕、一九八六・一二・二〇）

これらは、手許の例を任意に拾ったものだが、いずれも、述部の示す行為が事実レベルでは引用句にひかれる発話・思惟と等しいβ類であり、引用句は、いずれも「同調する」「頑張る」「びっくりする」「腹を立てる」にあたる行為の実物をリアルに表示していると解せられる。

なお、次のように、引用句「～ト」にひかれる発話・思惟と、

述部の示す別個の行為が同時共存するという意味関係において、引用句と述部が結びついた構造の「引用」を、筆者はα類と呼ぶが、その場合にも、引用句には現実の行為・出来事としてのコトバが引かれることは同様である（だからこそ、「言って」のような述語句がなくても、引用句は一つの発話行為を示すものとして、直接以下の述部にかかっていける）。

⑲ 少尉の目がいよいよ光を増した。そして急に、「長居した、失敬する」と背を向けた。（荒俣宏「帝都物語1」）

以上のように、筆者は、「引用」において引用句にひかれるのは、基本的には、出来事・行為（事柄、もしくはサマ）としてのコトバと見るのがよいと考えている。この点は、この稿で先に見た「XヲYト考エル／言ウ」の場合のような、発話・思惟を分析的に引く形の引用句についても同様である。しかし、こうした、出来事・行為としてのコトバを引く一般の「引用」の周辺には、明らかにそのようには考えられない、モノとしてのコトバを引くものも存在する。その一つの例は、次のような「……ニ～トアル」構文で書かれた（所与の）コトバが引かれる例である。

⑳ 表札に、「佐藤明浩　ますみ」とある。

こうした、言語行為の所産として所与のモノとなったコトバは、行為者から切りはなされてモノ化した、まさにモノとしてのコトバといえるだろう。

一方また、言語行為の所産ばかりでなく言語行為の素材としての言語記号（単語）もそれのみではやはりモノと言うべきであろう。つまり、対象にあてはめられ、また、その場新たに形成される言語記号も、そればかりではなお行為ならざるモノであると言うよりあるまい。してみると、そうした言語記号をとり出して示す、この稿の「呼び名を引く『引用』」も、そうした周辺的なもの――モノとしてのコトバを引く「引用」の一つとして位置づけるべきものということになるだろう(7)。

ちなみに、「XヲYト命名スル」のような表現について、拙稿（一九八六）ではβ類の「引用」と扱っているが、現在の考え方はここで述べたとおりである。訂正しておきたい。

4　以上、この稿では、「XヲYト名ヅケル／呼ブ」のような構文をとる呼び名を引く「引用」について、「考える」「言う」など思惟・発話の意の動詞を述語とする一般の「引用」と対比しながら簡単に検討し、「引用」全体の中におけるその位置づけを述べてみた。

最初に述べたように、次の稿では、この種の、呼び名を引く「引用」自体も細かくは更に分類されるものであり、そのそれぞれが文法的に性格の異なるものであることなどを、現象に即して述べてみることにする。

（一九八九・三・五　稿）

注

(1)「名づける」などは、対象をニ格でも示せるが、以下の

論では、典型的なヲ格をとった場合を専ら考える。ヲ格をとりにくく、また、今日では言い切りの形で使いにくい「題する」などは、次の稿で一部言及するが、主たる考察の対象とはしない。「名のる」等自称の表現については別稿を用意する。

(2)益岡（一九八七）S.91f.

(3)益岡（一九八七）は、次のような例をあげて、認識動詞述語の場合のみ、ヲ格と引用句との語順に制約があるとした。（S.145 なお、※は益岡の判定）

ア・a　当時は大学のことを象牙の塔といったが、……
（高橋たか子「高橋和巳の思い出」）

→ア・b　当時は象牙の塔と大学のことを呼んだ。

イ・a　彼は、中国の儒教を、いつわりの道と考え……
（梅原猛「学問のすすめ」）

→イ・b※彼はいつわりの道と中国の儒教を考えた。

しかし、筆者には、イ・bが明らかに不適格な表現だとすることは疑問に思える（例えば、ヲ格を「中国の儒教のことを」とするだけでも随分許容度が上がろうし、ア・bの方を「大学を」とするといささか落ち着かなくなるだろう）。実際の用例では、イ・bのような語順の例はいくらも見られるようであるし、また、次のような例でも、引用句とヲ格成分の語順を入れかえてもさほど不自然にならぬように思えるがどうだろうか。

ウ・a　そして少しひがんだ者達は自分の愚を認めるよりも葉子を年不相応にませた女と見る方が勝手だったから。
（有島武郎「或る女」）

→ウ・b　そして少しひがんだ者達は……年不相応にませた女と葉子を見る方が勝手だったから。

エ・a　「国家社会」を一つの全体と見て、その秩序を維持し、その成員の福祉の増進をはかっていく行為である。
（中村菊男「社会をうごかすことば」）

→エ・b　一つの全体と「国家社会」を見て、……

私見では、「考える」「見る」等認識動詞が述語となるこうした表現は、現実の思惟・認識の心内発話を分析的にひくものなので、ヲ格―引用句の語順が主―述の順に対応するものとして基本的ではあるが、それが絶対的とは言いにくいように思われる。

(4)三上（一九五三）S.341

(5)森山（一九八八）S.80、S.84参照。

なお、森山は「彼（のこと）を『馬鹿だなあ』と思う」のような文は言いにくいとして、「引用成分の主語のヲ格による判断対象の繰り出しでは、終助詞が分化するような直接的引用はできず、引用という扱いが適当かどうか検討する必要があるかもしれない」と述べているが、筆者の語感では右のような文は特に不自然とは思えない。強いていうなら、「思う」のような基本形言い切りの形をとった例

文がいかにも作りもの臭いからではないか。例えば、「その時は彼のことを馬鹿だなあと思ったよ」とすると何ら不自然ではないと思うがどうだろう。よって筆者は、「終助詞が分化するような直接的引用はできず」という森山の断定はあたらないと考えるし、「引用という扱い」で問題ないものと考える。

(6)ちなみに、益岡が「XヲYト考エル」の「Yト」を必須補語的成分と考えるなら、以上見たように、同様にして「XヲYト述ベル（言ウ）」のような、発話を意味する述語動詞がこうした構文をとった場合の「Yト」も必須的ということになろう。この点指摘がないのは不審である。

(7)その他、「言い換え」「訳出」「読みつけ」のような場合の「引用」も、言語行為の素材としての言語記号を引く「引用」といえよう。

オ　「わが」「われ」は子音が取れて「あが」「あれ」ともなるが、これはちょうど「わたくし」を「あたくし」「あたし」と言うのと同じだ。

（森田「日本語をみがく小辞典〈名詞篇〉」）

カ　そういえば、かれは、「幸長」を「行長」とかきあやまったばかりではなく、「西仏」を「生仏」とかきあやまっている。（花田「小説平家」）

キ　歌の末尾の「やさしき」は、「ハヅカシイ」と訳されているが、決して誤りではない。

（佐竹昭広「古語雑談」）

ク　現代では「雑談」の二字を何のためらいもなく、ザツダンと読む。

（同右）

この種のものについては、いずれ整理する必要があろう。

参考文献

三上　章（一九五三）『現代語法序説』刀江書院（ただし、くろしお出版復刊版（一九七二）による）

益岡隆志（一九八七）『命題の文法』くろしお出版

森山卓郎（一九八八）『日本語動詞述語文の研究』明治書院

藤田保幸（一九八六）「文中引用句『〜ト』による『引用』を整理する——引用論の前提として——」（宮地裕（編）『論集日本語研究（一）現代編』明治書院）

——（一九八八）「『引用』論の視界」（『日本語学』7—9）

——（一九八九）「『実物表示』をめぐって——引用論のために——」（『国語国文学報』第四十七集）

（愛知教育大学助手）